

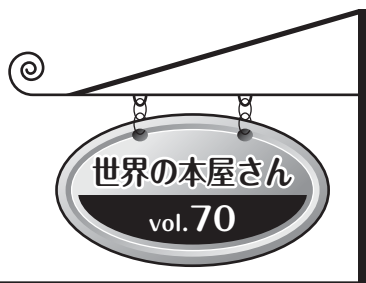
ほんのしるべ

書標

2017.
10月号

2017年10月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻467号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可





ラトヴィア・リガ ヤニスローゼ書店

ノセ事務所

能勢
仁



バルト三国の中央にあるラトヴィアには、唯一日本からの直行便が首都リガに就航している。十時間のフライトである。ソ連時代の一九七四年には神戸市がリガと姉妹都市になり、「里賀」と表記されたこともあった。杉原千畝さんがラトヴィア大使館に勤務していたこともあり、日本人には好意的であった。ラトヴィア全体ではロシア語を話す人の割合は三十八%で、この言語状況はそのまま書店の棚にも反映されていた。

ヤニスローゼ書店はバローナ通りの電車道に面していて、リガ中央駅から近い立地である。この書店の前に公共両替所があったので、リガ滞在中はよく通ったものだ。店舗は石造の頑丈な店で、全体

で百坪くらい。店頭にJANIS ROZESと表示があり、ウインドウから店内が見通せるので入りやすい書店である。店舗構造が面白い。一階、半地下、中二階と三層に分かれており、それぞれ売り場のジャンルが異なるので、常連さんは目当てのフロアに直行していた。一階は新刊・文芸書・インフォメーション、中二階は写真集・芸術書・実用書・こどもの本・バーゲンブック、半地下売場は教科書・辞書・参考書・ガイドブック・文具・紙類となっていた。中でも写真集、芸術書の売り場は全点表紙陳列で圧巻であった。各階にレジがあり、女性がきびきびと働いていた。お客様に評判の良い印象を受けた書店である。

そして、ある夜、ハロウィンのかぼちゃが

くいのつえで にんまりわびしい 子どもたちは

おかしな いししょうをつけて こわそくに

うれしそうに 走っていきます。

やがて、風がさいこの葉っぱを ふきおとし、

霜は じめんふかくに 根をおろします。

『きんいろのとき ゆたかな秋のものがたり』

アルビン・トレッセルト文

ロジャー・デュボアザン絵

えくにかおり訳 (ほるぷ出版) より



もくじ

世界の本屋さん 70

「書標」歳時記〈10月〉

著書を語る(56) 『筑紫万葉恋ひころ』

奈良大学文学部教授 上野 誠

書標・書評 『FAKEな平成史』ほか

特集 最新テクノロジーが解き明かす人文社会科学

〈神経〇〇学入門〉

いい文章を読みたいと思ったら

おすすめフィクション・ノンフィクション

今月のおすすめ

社会科学	16	コンピュータ	18
自然科学	19	医学書	20
人文科学	21	文学・文芸	22
文庫・新書	23	芸術	24
実用書	25	地図・旅行書	25
語学・辞典	26	児童書	27
読者から			
インフォメーション			
本屋つらばなし	30		
「街のサイズとニーズにあった 大型書店とは」	28		

※表示価格はすべて本体価格です。

『筑紫万葉恋ひごころ』

奈良大学文学部教授 上野 誠



たとえば、学者として一流であったとしても、学者は一流の文筆家ではない。筆一本で食ってゆけないのだから、文筆ということについていえば、二流ないし素人なのだ。私は常にこのことを念頭において、もの書きをしている。

『筑紫万葉恋ひごころ』は、西日本新聞の連載を一冊にまとめた本であるが、私は五十回の連載をひと冬で書き上げて、五十回分一括して渡した。このやり方は、二流の文筆家である私の連載の流儀だ。皆そう言うのが驚くが、私とすればあたりまえだのクラッカーである。二流には二流の、素人には、素人のやり方というものはあるはずなのだ。原稿を書きながら、読者の反応を見つつ、仕上げてゆくなどということは玄人の仕事のやり方なのである。すべてを書き上げて、全体を調整しないと、素人、二流は、必ず失敗する。

こういういわば一括納品の流儀は、母や祖母から受け継いだ博多小商人の流儀である。わが家は、零細な洋品店だった。私は洋品店の次男坊なのだ。客から注文を受けると絶対に納期を守って、一括納品する。こう書くのが格好よいけれど、中小企業は、納期を守らないと次の注文が来ないのだ。また、納品予定日より早く納品準備ができれば、注文先の都合のよい日に納品できる。だから、子ども時分から、早いことは最大のサービスだと教えられてきた。若い時は、原稿を書きたくても、書くチャンスが与えられなかつ

た。そんな時に、突然、執筆の依頼が来るがあった。大先生が、途中で執筆を降りたのだ。すると、大先生が半年かけて書く原稿を、若先生は一ヶ月で仕上げなければならぬことに。しかし、これは若先生にとつて大きなチャンスだ。グレードが高い名門の雑誌にピンチヒッターで書く。いわば、代役をステッブとするわけである。

『筑紫万葉恋ひごころ』執筆中に、母からこんなことを言われた。超一流は、原稿が遅れても次の原稿依頼が来る。たとえば、原稿が書けなくても、次の仕事がある。一流は、メ切に間に合わない。次の原稿依頼は来ない。なるほど。さらに、母はこう言うのだ。二流はメ切の前に、原稿を提出しないと次の仕事は来ない、と。私はここまで母の話聞いて、せつなくなつた。こうしないと、二流の洋品店は生き残れないのだ。祖父も、父母も、そうやって、注文を受けてきたのであろう。人さまより、よいものを早く安く納品しないと、次の仕事は来ないのだ。

そもそも、二流の店には、価格の決定権などもとよりない。発注者の言い値なのだ。ここでも母の次の金言が光る。

値段などというものは、客が決めるもんだが、こちらがいろいろけんめいやつていたら、客は無茶な値を付けたりしない。客が、うちの店が潰れたら困ると思うくらいの仕事をしてないとだめだ。

日本の中小企業というものは、こういった環境の中で、生き抜いてきたのだ、と思う。また、それを苦とせず、楽しむくらいでないで生きてゆけないのだ。

私は『筑紫万葉恋ひごころ』のなかで、

生ける者

遂にも死ぬる

ものにあれば

この世にある間は

楽しくをあらな

(大伴旅人 卷三の三四九)

を、「生きとし生ける者は…… いずれは死ぬもの だから だからこの世にある間は 楽しく生きなきゃあ ソン」と訳した。そして、「踊るアホウに見るアホウ、同じアホなら、踊らにや、ソソソソ」というのは、一種の享楽主義だが、今生きて目の前にあることを最優先すべきだという生の哲学を語る言葉でもある」と書いた。全力投球でも、にこにこ、苦を楽しんでこそという生の哲学だ。

が、しかし。かつては繁盛していた洋品店も、昭和四十年代には、人さまに迷惑はかけなかったものの、あえなく自主廃業。時代の波に乗り遅れたのである。お蔭で、兄も私も、洋品店を継ぐことはできなかった。そして、ゆえあって私は万葉学者として、今、活動している。でも、私の心のどこかに、二流の小商人の感覚というものがある。連載はすべて書き上げて、メ切より先に入稿する。そうすれば、次の原稿依頼が来るかもしれないではないか。そも、大学、大学の研究室というものは、ある面では個人商店なのだ。商店主は私で、仕事を手伝ってくれる学生は店員さんだ。

二百名近い学生が、ほぼ三日間缶詰状態で『古事記』を読むスクーリングというものがある。奈良大学通信制学部の名物授業の「神話伝承論」である。全国からやって来る学生さんは、十代から

八十代までと幅広い。やって来た学生さんのお世話は、上野誠研究室のゼミ生の仕事だ。テストもあれば、遠足もあるし、おやつも出さなくてはならない。もちろん、私もわかり易い授業を心がけてはいるのだが、スクーリング生ひとりひとりにお世話をするのは、ゼミ生だ。戦争で大学進学を逃した人もいて、八十歳にして晴れて大学生になった人もいる。とにかく、満足して帰ってもらいたいのである。小商人の私は、まずは、お世話役のゼミ生の笑顔が大切だと考える。客商売の基本は、やはり笑顔。「はい、喜んで」と笑顔で注文を受け、全力投球で納品。これしかない。

話は、最後に母の話に戻る。私は、母にこう言った。俺は二流だから、原稿は必ずメ切前に出してるよ、と。しかし、母は私にこう言うのだ。お前はまだ三流だ、と。当然、血相を変えて私は聞いた。では、三流はどうしたらよいのか、と。すると母は笑いながらこう言う。出版社に行つて、玄関先の掃除でもしていたら、次の仕事が入るかもよ、と。

私は絶句して失神した。



『筑紫万葉恋ひごころ』
西日本新聞社・1,400円



『FAKEな平成史』

森 達也著

KADOKAWA・一六〇〇円

振り返れば「平成」は、激動の世界史と共にあった。

はじまりの年にベルリンの壁が崩壊、世界は東西冷戦の終焉へと一気に進み一方で中東での終わらない戦争が始まる。「九一一」があり、リーマンショックを経て、今、北朝鮮の核開発と世界への挑発。

日本は、二度の大震災を経験した。一度めは同じ年にオウム真理教事件、二度めは原発事故を伴い、人々を不安の淵に追いやる。不安は人を群れさせ、「群れ」は自発的な隷従、自由からの逃走を選ぶ。擬似的民主主義国家日本の姿が露わとなった時代。だから森達也は、この三十年を「FAKEな平成史」と呼ぶ。

放送禁止歌、ミゼット（小人）プロレス、天皇制、オウム、北朝鮮、メデア論……、森が「平成」を総括するために用意したトピックは、どれも森じしんが、ディレクターとして、作家として深く関

わってきたものばかりだ。それぞれのトピックに合わせて選んだ魅力的な対談相手も、森に近い人ばかりである。本書は、「森達也の平成史」と言ってもいい。「当然ながら半径は小さい」と、森じしんも言う。

だが、そのことが大切なのだ。直近の歴史を、大所高所から「客観的」に評するのではなく、その中で一人ひとりがどう生きたのかに個として向き合うことが、その作業なくして、個がバラバラにされ、集団の暴走のみが目立つ「FAKEな平成史」を、乗り越えて前に進むことはできない。

メデアが「集団化」と「不偏不党」と「忖度」から逃れ出て、一人ひとりが一人称で語り始めることなくしては。

(フ)

『夫・車谷長吉』

高橋順子著 文藝春秋・一六〇〇円

得体の知れない圧迫感を胸を圧する、気持ち悪い絵手紙をもらったのがはじまりで、心が移ろい、私小説家車谷長吉とこの世の道連れになった詩人高橋順子。著者高橋順子の筆は全編潔い。

冒頭の馴れ初めからドラマを見ているようである。しかし、このドラマ、結婚後ただならぬ様相を呈してくる。長吉の小説のモデルの女性に恨みを買い、妻は気になりつつも、遠くから見つめる。

小説家等に礼を欠く振る舞いを繰り返す長吉は、傍目から見れば幼児性が残る、正直な激しい人ですむかもいけないが、妻となれば話は別である。火の粉が飛んでくるのは必然、申し訳ないと思いつつ、全く動じていない。この妻ただ者ではない。私小説家車谷長吉にしてこの妻ありである。

夫が強迫神経症にかかり、「付喪神が付いた」と奇妙なことを言い、頻繁に手足を洗う。こんな時でも、小説を完成して欲しい。書かせてあげたいという視点が詩人の妻の優しさと強さに満ちている。

しかし、こんな至福の時も。お互いに書きあがった原稿を真っ先に見せ、感想を請う。これは創作するものにとつてはうっとりする時間。

直接的な愛情表現は書かれていない。むしろ書いてしまった方がいいのかという暴露も多々描かれている。ただ腹立たしいという気持ちは皆無で、あー長吉さんだ

めですよという感じなのは、根底に愛がある故。

この本を著者は夫との共著であるというが、そこはかとなく滲み出る尊愛の情が妻から夫への恋文のように感じとれた。

今、無性に車谷長吉の小説に触れ、この上もない美しいものとして昇華した絵手紙を見て、ふたりの奇異な愛に包まれてみたいと思う。

(マ)

『吉田松陰の再発見』

山口栄鉄著 芙蓉書房出版・一八〇〇円

直接的と間接的に吉田松陰と接した外国人の記録です。

嘉永七年一月十六日(一八五四年二月十三日)に前年六月に続き再来航したペリー艦隊は日米和親条約締結を求め、約一月の協議の末、三月三日に米国と江戸幕府との間で締結、調印した。三月二十七日、元毛利家家臣吉田松陰とその弟子金子重之助が伊豆下田においてペリー艦隊旗艦ポーハタン号にアメリカ密航を希望して乗り込みますが、ペリーはこれを拒絶。これを「下田踏海」と言います。実は松陰は、この数日前に下田の町を散歩するペリー艦隊の士官に密かに

「投夷書」と呼ばれている「密航決意表明」の手紙を手渡しています。そしてポーハタン号の甲板上で筆談交渉をしたペリー艦隊の通訳官サムエル・ウエルズ・ウィリアムズの記録が、エール大学に「ウィリアムズ家文書」として保管されているところの本には書かれています。

そして二章には、『宝島』などで有名な英国の文豪ステイブンソンが、松下村塾で松陰から学んだ長州出身の留学生正木退蔵から聞いた吉田松陰の姿を書いているものの全文和訳も書かれています。実は僕はずっと以前から興味があり読んでみたかったです。(尾)

『コンプレックス文化論』

武田砂鉄著 文藝春秋・一五〇〇円

本書は自己啓発書ではない。

コンプレックスを克服し、「小さいことにくヨクヨ」しないで前向きに生きていきましょう、などとは決して言わない。むしろ著者はそうした紋切型の表現に敏感に反応し、注意深くそれら进行を避けていく。

「コンプレックスが文化を形成してきただのではないか」という仮説を立て、様々

なアーティストへのインタビューを交えながら、しつこく考察し、探求していくのが本書である。とりあげるコンプレックスは(天然パーマ・下戸・解雇・一重まぶた・親が金持ち・セーラー服・遅刻・実家暮らし・背が低い・ハゲ)で、それらは「世の中の小さいことにクヨクヨするな案件」であり、もしかしたら「大きなコンプレックスを投じて、ほら、これに比べれば大丈夫だよ、しょせんその程度だよ、などと暴力的に自己を啓発してくる」人がいるかもしれない。

しかし、それぞれが抱える苦悩や怒りや葛藤は本人にしか分からないし、感情の度合は他人が外から決めつけるものではない。

「たたかい続ける人の心を

だれもがわかつてるなら

たたかい続ける人の心は

あんなには燃えないだろう」

吉田拓郎のデビュー曲「イメージの詩」の一節である。

「しょせん小さなことでしょ」と決めつけてくる人達には分らないであろう、「たたかい続ける人の心」が「切実な表現」を生み、文化をつくるのである。(英)

最新テクノロジーが解き明かす人文社会科学

～神経〇〇学入門～

既存の人文社会科学の分野に「神経」という二文字をつけた、「神経〇〇学」という学問についてご存知の方はどのくらいいるだろうか。

私たち人間の「こころ」が心臓ではなく脳にある、という事実は今や社会的な常識として共有されるようになってきているが、じつは現代の最先端の脳研究は、その遙か先の先まで進んでいるらしい。神経細胞が活動するときに起きる局所での血流増加といった脳内の反応を視覚化するfMRIなどの新たな手法の開発によって、今では私たちの脳がどのように外界を知覚し、物事を判断し、命令を発するかなどを細部にわたって検証できるようになっているようだ。

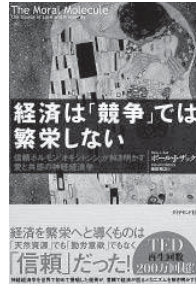
神経経済学、神経倫理学、さらには神経美学や神経文学といった最先端の研究について、またそこから浮かび上がってくる「人間」の姿とはどのようなものか、そしてこれらの研究から私たちは何を学び、どう社会に活かしていくことができるのか—考えるヒントになる本を紹介したい。

まずは、私が最初に目にした神経経済学の紹介から始めよう。扱っている事例が身近で、初心者にもわかりやすいのがいい。

『脳の中の経済学』（デイスカヴァー携書／大竹文雄・田中沙織・佐倉統著／一〇〇〇円）では、「A…今すぐに一万円もらう、B…一年後に一万五〇〇円もらう、どちらを選ぶ？」といったアンケートの結果をもとに、経済行動を生む脳の仕組みについて、また意思決定の際に脳内で起きていることについて、一般の読者向けに解説している。株式投資をされている方は、投資の判断時に自分の脳内で何が起きているか思い浮かべながら読むのがおもしろいかもしれない。

『経済は「競争」では繁栄しない 信頼ホルモン「オキシトシン」が解き明かす愛と共感の神経経済学』（ダイヤモンド社／ポール・J・ザック著・柴田裕之訳／一八〇〇円）では著者は、自由競争によって格差が拡大していく現代の資本主義社会を背景にしながら、オキシトシンという物質によって引き起こされる「信頼」や「共感」に基づく道徳的な行動が経済を繁栄へと導くと論じる。ひとつひとつ

の実験や考察が興味深いだけでなく、オキシトシンという物質についての話でありながら、人間関係における信頼や愛についてのメッセージが全体にあふれていて、とにもかくにも魅力的な一冊。



『経済は「競争」では 繁栄しない』

様々な分野における社会神経科学の研究についてまとめた新曜社の「社会脳シリーズ」（菅阪直行編）では、手頃なお値段で最先端の専門的な研究について読むことができる。一巻目の『社会脳科学の展望 脳から社会をみる』（二一八〇円）から始まり、人はなぜ美しさに惹かれるのか、美しさを感じる脳活動にはどのようなものがあるのかなどについて考える神経美学（『美しさと共感を生む脳神経美学からみた芸術』二二〇〇円）や、本読みの方々におすすめしたい神経文学についての巻もある。『小説を愉しむ脳

神経文学という新たな領域』（二六〇〇円）では、文字を読み取る目の動きやそれが言語によって異なること、また漢字を読むときは仮名のときより右半球の関与が大きいといったことなど、普段（そしてまさに今も！）自然とこなしている「読む」ことの脳内科学を知ることができる。個人的に一番おもしろかったのはオノマトペについて書かれた章で、音や動作を表すオノマトペそれぞれで反応箇所が異なることに驚いた。それだけでなく、同じ痛みを表す「すぎすぎ」と「ヒリヒリ」にも違いがあるらしい。中世のかの有名な「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」を思い浮かべながら、このオノマトペによって喚起される感覚は、脳のどこから生まれているのだろうかと思いをめぐらす。



『小説を愉しむ脳』

少し歴史を遡ってみよう。シナプスの機構と人間の行動を関連させる発想は、神経生物学者でもあった初期のフロイトの頃にはすでであった。二十世紀前半に一度は、犬の唾液の反射実験で有名なパブロフなどが提唱した行動主義心理学が主流となるが、それに異を唱え、神経ネットワークに注目したヘップの研究が今日の神経科学研究の柱になっている。脳は刺激に反応しているだけではなく、刺激がないときでも活動している。一九四九年に発表した『行動の機構（上下巻）』（岩波文庫／鹿取廣人ほか訳／上巻九四〇円・下巻八四〇円）でヘップは、脳神経シナプスの結合や切断がこころの働きに重要な役割を果たすことを体系的に論じ、本書は記念碑的な著作となった。

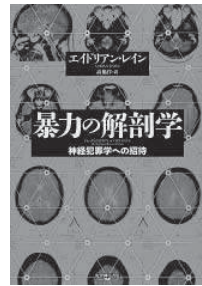
このあたりの歴史的な変遷や背景は、『わたし』はどこにあるのか ガザニガ脳科学講義（紀伊國屋書店／マイケル・S・ガザニガ著・藤井留美訳／二〇〇〇円）で学ぶことができる。認知神経科学の世界的権威が二〇〇九年に行ったギフォード講義をまとめたものである。脳科学の発展の道筋をたどりながら、「私

を動かしているのが誰（何）なのか、自由意志はあるのか、ないとしたら「私」のしたこと責任は誰がとるのか、社会制度はそのことをどう考え扱うべきなのかについて、ときに冗談を交えながら語っていく。歴史のおさらいもでき、脳科学が直面している問題についても考えることができる。



『わたしはどこにあるのか』

より体系的に読みたいなら、『あなたの知らない脳 意識は傍観者である』（ハヤカワ文庫／デイヴィッド・イーグルマン著・大田直子訳／九八〇円）がおすめだ。行動をコントロールしているのが「自分の意識」ではないことが明らかにになってきたが、それを政治的なレベルにおいてもどう考えていくか。より広いレベルにおいて社会と「私たちのものではない脳」との関わりを考察している。



『暴力の解剖学』

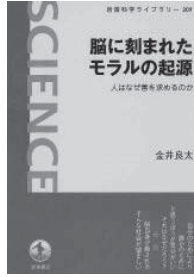
自由意志に関連して興味深いのが『暴力の解剖学 神経犯罪学への招待』（紀伊國屋書店／エイドリアン・レイン著・高橋洋訳／三五〇〇円）だ。いくつもの実際にあった事件について検証しながら、犯罪と脳の関連を明らかにしていく。たとえば、このような事件—もとは温厚で優しい性格だった男が、再婚相手の娘にあるときから性的暴行を働くようになった。自身の性的欲求を抑えられず、収監されてからも女性を見れば手を出そうとした。ところが右前頭葉に腫瘍が見つかったのでもそれを切除したところ、性的欲求はなくなり、もとの温厚な人柄に戻ったという。その後、腫瘍が再発したときにまた性的暴行を繰り返すようになったことで、前頭葉の腫瘍と性的暴力の因果関係が証明されることになる。

ではここで質問したい。この男性に罪・責任はあるか？ 腫瘍を取り除いて元の温厚な性格に戻った彼は、それでも自分の「罪」を償わなければならないのだろうか？ 法はどう適用されるべきなのか。今までの法体系では対応できないところに科学は到達しているわけだが、それをマイナスに捉えるのではなく、最新の知見を元いかに社会をより良い場所にしていけるかということを著者は問うている。

『平気で暴力をふるう脳』（草思社／デブラ・ニーホフ著・吉田利子訳／二三〇〇円）はより広範な、凶悪犯罪だけでなく日常の中にある暴力について脳との関連をまとめている。キレる若者や子どもの成長に関する記述もある。

制御の利かない脳、「暴力的な」脳についての話が長くなってしまったが、種の生存のために進化してきた私たちの脳は、「共生」のためと考えられる反応もしばしば示す。『脳に刻まれたモラルの起源 人はなぜ善を求めたのか』（岩波科学ライブラリー／金井良太著／一三〇〇円）、『モラルの起源』（岩波新書／

亀田達也著／七六〇円）、そして『つな
がる脳』（NTT出版／藤井直敬著／二
二〇〇円）を読むと、明らかにされてき
たのは、脳は格差を嫌うということ。脳
は利他的な反応を示すということ。脳は
他者とつながりたがるということ。どう
いう条件下で、また、どういう理由で協
働が生じるのかを解き明かすことで、よ
り良い社会を実現する手がかりが見つかる
のかもしれない。



『脳に刻まれたモラルの起源』

せっかくなので、少々変わった一冊も紹介しておきたい。『ゾンビでわかる神経科学』（ヴァースタインほか著・鬼澤忍訳／太田出版／二〇〇〇円）では、ゾンビという非科学的な存在を大真面目に研究する体裁で、神経科学について解説しているユニークな本だ。笑いながら読み進めれば、脳に関する基本的な知識

を身につけられるので楽しんでほしい。



『ゾンビでわかる神経科学』

さて、ここまでさんざんおもしろがって種々の脳神経科学に関する本を並べてきたが、読めば読むほど、私たちに「自由意志」なんてないのかと絶望したくなつたことを告白しておきたい。経済活動をすることも、人を傷つけることも、何かを美しいと感じたり、道徳心を持つたりすることすらも、脳の反応であつて私の意志ではないのか？ もしそんなのであれば、「私」とは一体、何なのだろうか？ と無力感にとらわれそうになる。だが、ナイーヴに思い悩んでみても何かが変わるわけではないと、ガザニガの言葉を思い出しながら自分に言い聞かせる。

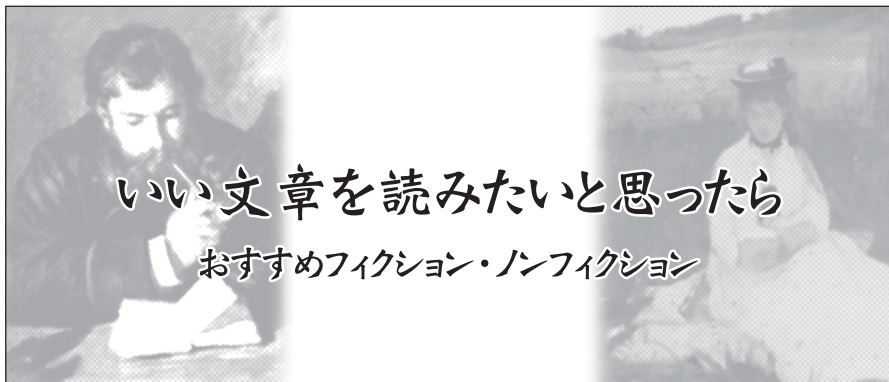
「科学が生命、精神の本質をどれだけ

解きあかそうと、私たちが大切にして
いる人間としての価値は崩れない。私たち
は人間であつて、脳ではないのだ。脳が
つくりだす精神が、他の脳と作用しあつ
たときに生じる抽象作用、それが私たち
だ。その抽象作用のなかに私たちは存在
する。」

科学は人を幸福にするものだと思
はれる。脳神経科学と人文社会科学の融合と
いう新しい知見から、より良い社会への
道筋がいくつも見つかるよう願う。

最後になつたが、私はこの分野に初
めて触れ、目から鱗をほとほと落としな
がらこれらの本を読んだものである。足
りない点や理解に誤りもあるかもしれ
ないが、そこはどうかご容赦いただきたい。
(岩波書店 辻内千織)

*愛書家の楽園・特集「最新テクノロジー」
が解き明かす人文社会科学×神経○○学
入門」でご紹介した書籍は、ジュンク
堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡
店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店
地下二階にて、十月十日～十一月九日ま
でフェア展開中です。



いい文章を読みたいと思ったら

おすすめフィクション・ノンフィクション

ジャンルは問わず、いい文章が読みた
いなと思つて本を探すことがあります。
そんな日はちよつと疲れているのかわし
れません。それでも本が読みたい方へお
すすめの本を集めてフェアをしました。



『伊丹十三の本』

まずは『伊丹十三の本』（新潮社・「考
える人」編集部編・二二〇〇円）。

一九九七年末に逝去した伊丹十三は、
七〇年代から幅広く活躍したアーティス
ト。映画監督であり、俳優であり、エッ
セイストであり、翻訳家、イラストレー
ター……。多才な伊丹十三の姿をぎゅつ
とまとめた一冊。伊丹氏の数あるエッセ
イを並べてみたら、博多店で今年一番人
気は「問いつめられたパパとママの本」
（中公文庫・五九〇円）でした。生活の
なかに溢れる不思議が次々に明かされ
て、非科学的と謳いながらも実はとつて

も科学的。文学と科学はとつても近いこ
とを感じる名エッセイです。

「夜二ナルトナゼ眠ラナクチャイケナ
イノ？」の答えなどもう最高で、眠る妻
の反応を見て離婚を考えた男に「すぐに
帰つて謝りなさい」。短い回答の隅々に
見える家族愛。悩みごとがある時は伊丹
十三のエッセイを手あたり次第読んでみ
ると、肩の力が抜けますよ。さまざまな
権威が消え去つて、平行な場所にいるよ
うな安心感が生まれます。前出の『伊丹
十三の本』の中には、妻へ宛てた手紙（一
度破り捨てられている）も全編直筆原稿
が掲載されていて、過ちを悔いる男の情
けなさも愛らしく感じます。



『問いつめられた
パパとママの本』

上質なノンフィクションや学術書、
エッセイを生み出してきた雑誌「考える
人」の休刊はとつても残念なのですが、そ

これから生まれた新潮社の本を多くの方に知って欲しいと思っています。編集長だった河野通和さんの『考える人』は本を読む』（角川新書・八〇〇円）は今に活きるブックガイドとして、吉田直哉『思い出し半笑い』（文藝春秋・品切）や末盛千枝子『私』を受け容れて生きる』（新潮社・一六〇〇円）など、厳しさの中に美しさを含んだ本のレビューです。



『考える人』は

初代編集長松家仁之さんの小説『火山のふもとで』（新潮社・一九〇〇円）もこの機会にぜひ読んでみてください。読売文学賞受賞作。建築家のもとで働く人たちのプロも凌ぐ料理の腕前とその表現など、伊丹さんの遺伝子を登場人物に感じる場面も多く登場します。『火山のふもとで』は若き建築家の卵が主人公の小説。建築と文学も相性がいいですね。『建

築文学傑作選』（講談社文芸文庫・青木淳選・一八五〇円）というユニークなセレクションもおすすめてです。



『火山のふもとで』

『建築文学傑作選』の中でも「日は階段なり」で登場する詩人の平出隆さんのエッセイ集『新版 ウィリアム・ブレイクのバット』（幻戯書房・二八〇〇円）は特に人気です。世界の町を旅しながら描かれたホテルの部屋で起きる小さな出来事がどれも寂し気で、誰かに大声で披露するようなことではないけれど、でもそっと胸に留めておきたくなるような一冊。

旅先で懐いた猫を「留守を守る猫」とイメージし、その街は旅の拠点とする旅。画家ドナルド・エヴァンズの足跡を辿りながら、アメリカ・オランダ・イギリスの縁ある土地を訪ねていきます。中盤からは野球愛、自動車熱についても語られ

ています。



『新版 ウィリアム・ブレイクのバット』

あとがきに幻戯書房の創業者辺見じゅんさんがタイトルに込めた思いも。辺見さんが西鉄ライオンズの天下弘について書いた『虹の生涯』（文芸文庫、新潮文庫、どちらも品切）などを想起させるラストです。話は反れますが、以前角川春樹事務所主催の会合に出席した際、春樹社長が平岡陽明『ライオンズ、1958』（ハルキ文庫・六四〇円）のことを話しながら、「姉（辺見じゅんさん）が書いたね……」とお話されていました。こんな風にお姉さんのことを話す姿に驚いたのを思い出します。

平出隆さんの本は海外からのお客様から時々問い合わせを受けます。『猫の客』（河出文庫・五七〇円）がフランスで評価されて以降、日本語でも読みたいと書

店を訪れる方が多いようです。今回のフェア期間中の問い合わせはありませんでしたが、音もなく売れてゆきました。目に留めていただけ嬉しかったです。

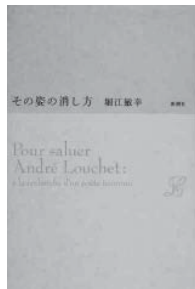


『猫の客』

文学や芸術作品の背景を探しながら旅をする小説として堀江敏幸『その姿の消し方』（新潮社・一五〇〇円）もおおすすめです。堀江作品はノンフィクションとフィクションの境目が曖昧で、架空の土地だとわかっていてもその地名を探してしまったりすることが多いです。本作はフランスが舞台ということもあり、登場人物も実在するのでは？などとい。この春から土曜の日経新聞で連載「傍らにいた人」が始まり、画家・野見山暁治氏の挿絵と一緒に毎週楽しんでいます。

日経書評が日曜から土曜に動いて、週末の朝の動きがすこし変わり、今までよ

りすこし余裕を持って読めるようになりました。連載では野呂邦暢やシャルル・ルイ・フィリップ、安岡章太郎、小島信夫などの作品が連なって紹介されています。野呂氏の古い評論などを見返すと、ちようどこの夏『月の満ち欠け』（岩波書店・一六〇〇円）で直木賞を受賞して話題の佐藤正午さんのお名前が何度か登場しています。佐藤さんも野呂作品を愛した読者だそう。



『その姿の消し方』

野呂邦暢を偲ぶ菖蒲忌は毎年五月の終りに長崎・諫早で行われます。近頃は梅雨前の初夏のような季節です。亡くなった一九八〇年はこれほど暑くはなかったかもしれません。過ぎていった時間の長さを感じました。野呂作品はみず書房の随筆コレクションや、「大人の本棚」に収められた掌編の他、文遊社から小説

集成が刊行されています。関口良雄『昔日の客』（夏葉社・二二〇〇円）にも往時のエピソードが描かれていますので、こちらも是非。

画家・野見山暁治さんも素敵なエッセイが多数あります。中でも亡き妻との闘病の日々を描いた『パリ・キュリイ病院』（弦書房・二〇〇〇円）やパリで出会った藤田嗣治・椎名其二、駒井哲郎らの逸話や、義弟・田中小実昌のペーソスなどを描いた『四百字のデッサン』（河出文庫・七五〇円）がおすすです。田中小実昌のエッセイも合わせて読むなら『ポロポロ』（河出文庫・七〇〇円）も。戦地の實際を心に背負いながら、目の前の信仰を描いた作品。乾いたようなちよつとこるみのある文章が不思議に残りますが哀愁に酔わせてはくれません。



『パリ・キュリイ病院』



『舟越保武全随筆集』
巨岩と花びら ほか

先ほどすこしご紹介した末盛千枝子さんは、国際的にも活躍する絵本の編集者。その父・彫刻家の舟越保武氏による『舟越保武全随筆集 巨岩と花びら ほか』（求龍堂・二六〇〇円）。石造彫刻で知られる芸術家は随筆も多く残しています。全体としては静かな随筆ですが、幼い息子を亡くした時、啜嗟にセルロイドのおもちゃを買いに走り、従兄弟に分けてもらった水仙で棺を埋め、遺影の代わりに自ら乳児をスケッチした若い父親の姿を自ら書き記した文章のように、抑えきれない情動が描かれた作品もたくさん収録されています。

芸術家のエッセイとして、合田佐和子『90度のまなざし』（港の人・二八〇〇円）も是非おすすぬめしたい一冊。七〇年代から寺山修司・唐十郎・蛭川幸雄らの舞台

美術などで活躍した画家のエッセイ集です。娘二人と東京とエジプトを歩き来しながら過ごした日々や、書評や随想がユニークで詩情豊かにつづられています。一瞬にして異世界へ誘う絵の世界も勿論素敵です。『合田佐和子 光へ向かう旅』（平凡社コロナ・ブックス・二〇〇〇円）は、生前愛したのもや暮しの一端も垣間見えるグラフィックとなっています。合田さんは昨年惜しくも亡くされましたが、その言葉や絵が手元に残せる本が次々と刊行されることは嬉しく思います。



『90度のまなざし』

この棚を展開している途中、翻訳家の高橋啓さんに来ていただき、お話する機会がありました。棚を開んで今まで訳してきた本のお話をたくさん伺うことができた貴重な時間となりました。パスカル・キニヤール『世界のすべての朝は』

（かじかしや）
『加鹿啓・高橋啓訳・九二六円』を読んだ、官能的な表現と音楽世界を愉しんでみてください。



『世界のすべての朝は』

*『世界のすべての朝は』は、丸善博多店・ジュンク堂福岡店で取り扱っています。

高橋さんが翻訳した『文字の歴史』（創元社「知の再発見」双書・一六〇〇円）の中でキニヤールの文章の短編に触れたことが、多くのキニヤール作品の翻訳を手掛けるきっかけになったのだそうです。本書は本に携わる人ならば必読の一冊とのことで、早速読んでみると、文字の変遷は想像以上に劇的なものでした。今私たちが読んでいる世界もここに加わっていくのかと思うとスリリングですよ。なかでもフランスの書物の歴史は深く、本を読むならばもっとフランスの

本の文化を知っておきたいと思いがら、翻訳小説などを読んでいます。



『文字の歴史』

「エッセイ」という言葉もフランスの哲学者・モンテーニュ『エッセ』に由来すると言われます。ならば『エッセ』も。

『モンテーニュ よく生き、よく死ぬ』ために『講談社学術文庫・保町瑞穂著・二〇〇〇円』にはモンテーニュにとつてのエッセの在り方が読み取れます。十六世紀、宗教戦争の激しい時代。

「われわれの努めは日々の生活態度を作ることであつて、本を作ることはなく、戦いや諸国を勝ち取るのではなく、われわれの行いに秩序と平穩を勝ち取ることなのだ。われわれの偉大な、名誉ある傑作は、賢明に生きることである。」

人生の凡庸ともいえる生活の機微をとらえ、書き綴つたのが『エッセ』。徒然

なるものを尊び、高邁なものとはしない。この距離感をもつて本を選ぶと、読書が楽しくなりそうです。



『青天有月 エッセ』

『エッセ』をモチーフにした面白い作品もあります。松浦寿輝『青天有月 エッセ』（講談社文芸文庫・一七〇〇円）は、その要素を引き継ぎ、先人たちの箴言を現代の知性につづけた随想集。ゴダール、ボードレル、梶井基次郎、西脇順三郎、李白、アンドリュウ・ワイエス、石原吉郎、白秋、吉田健一らの文章に〈光〉が生まれる瞬間を描写したユニークな作品です。〈光〉はそのまま〈言葉〉に通じ、光を追うことを〈言葉〉を追及する詩人の〈試行〉になぞらえて読むとより楽しめると思います。池澤夏樹責任編集『日本文学全集』（河出書房新社）では、松浦氏が松尾芭蕉「おくのほそ道」の選・

訳をしています。旅とエッセイ、芭蕉とモンテーニュ。東西を読み合わせてみると新しい言葉の世界が拓けるかもしれません。

東西を無尽に書き綴つた作家・堀田善衛の作品も合わせて読んでみるのもおもしろいでしょう。『時間』（岩波現代文庫・九八〇円）や、『時代の風音』（司馬遼太郎・宮崎駿共著、朝日文庫・五〇〇円）『上海にて』（集英社文庫・五七一円）など。いずれも戦後の文学を通して歴史を問う作品です。合わせて読みたいノンフィクションに松本重治『上海時代 ジャーナリストの回想 上・下』（中公文庫・各一四〇〇円）があります。こちらは今回のフエアの中でも大変よく売れたタイトルです。昭和七年末から六年間、日中交渉の実際を見たジャーナリストの回顧録は、後世の日本人に多くの教訓を残します。全編を通して冷静な筆致ですが、後半、ふと強い口調が顕れます。その文章に何を読み取るべきか。二〇一五年の復刊タイトルですので、お早めに手にとってください。



『上海時代
ジャーナリストの回想』

鄭鴻生「台湾少女、洋裁に出会う 母とミシンの60年」(紀伊國屋書店・天野健太郎訳・一七〇〇円)は、戦後を懸命に生きた女性のノンフィクションです。

一九三〇年代、日本統治時代の台湾で、「主婦之友」や「婦人倶楽部」などの雑誌を見本に独学で洋裁を覚えた少女が、日本人が経営する台南の洋装店で働き、日本へ渡って本格的な技術を習得後、台湾で洋裁学校を開いた女性の生涯を作家である息子が描いた作品です。日本統治は五十年にわたり、市井の人々にも多くの影響を及ぼしました。そのひとりである普通の女性の人生を切々と綴った文章を読むと、布一枚に未来を夢見た可憐で勇敢な少女たちの姿が目に見え、日常に着る服からドレスまで美しくと氣品に満ちていて、なにより自由がありま

した。生命力溢れる人々を捉えた写真が多く掲載され、「装苑」や「レディブティック」などの専門誌を読んで腕を上げていく若い女性たちの力強い眼差しが印象的で、とても元氣の出る本です。翻訳の天野さんは龍應台「台湾海峡一九四九」(白水社・二八〇〇円)や呉明益「步道橋の魔術師」(白水社・二一〇〇円)などを訳し、研ぎ澄まされた台湾文学を紹介しています。ご注目ください。



『台湾少女、洋裁に出会う
母とミシンの60年』

博多店はJ・R博多駅の真上にあるので、韓国や中国から多くのお客様がいらつしゃいます。以前は文房具のまとめ買いや、コミック、ブランドムックなどが人気でしたが、最近とても増えたお問い合わせは「ソーイング」と「編み物」の本です。皆さん日本語で書かれた手芸や洋裁の本を数冊お求めになります。既

製品を買うのではなく、自分で時間をかけて作ったものを身に付けたいという余裕が各国で広がっているのでしょうか。あくせくしている自分がちよつと情けなくなりませんが、経済力というのは「買う」力よりも、自分のために時間を使えるということではないかと改めて思います。



『本の未来を探索の旅
ソウル』

内沼晋太郎+綾女欣伸編著/田中由起子写真『本の未来を探索の旅 ソウル』(朝日出版社・二三〇〇円)などには、本屋の現在が見えます。ここから未来をどう読み解き、どこへ向かうか。本というものの存在感について日々悩みながら、本当に面白い本をお客様の「今」と「いつか」のために常に揃えていたいと思います。悩める本屋へ是非足をお運びくださいませ。お待ちしております。

(丸善博多店・徳永)

今月の
おすすめ

社会科学

質素であることは、
自由であること

有川真由美著

「生きる意味をもちなさい」

世界一貧しい大統領と言われたウルグアイ前大統領ホセ・ムヒカの妻、ルシア・トポランスキーはこう語った。

ルシア夫人はお嬢様育ちでありながら後の夫ホセと共に軍市政権に対するゲリラ活動に身を投じ、十三年間もの投獄生活を経験した。天国も地獄も味わってきただの。

生きる意味とは、本当にやりたいことだという。ルシア夫人にとっては困っている人を助けること。それができているから質素な生活でも満足なのだという。

幻冬舎

一一〇〇円

リスクと生きる、死者と生きる

石戸 諭著

著者は以前毎日新聞社に勤務し、現在

はネットメディアで活動する若い記者。本書は東日本大震災を取材した文章を、このたび単行本化したものである。数多くの被災者の方々に丁寧なインタビューをおこない、地震、津波、原発事故で受けた傷は、悲しみや怒りとともにまだ癒えず、痛みが続いていることを痛感させられる。福島県、他県への避難者、津波で全校児童の七割が死亡・行方不明となった石巻市大川小の関係者、元東電社員など、個人の生々しい声が集められた貴重な記録である。

亜紀書房

一七〇〇円



リスクと生きる
死者と生きる

国連で学んだ

修羅場のリーダーシップ

忍足謙朗著

忍足氏は三十年以上にわたり国連に勤務し、紛争地や途上国で食

糧支援などの任務をおこなってきた。この本は現地で携わった多様な経験をまとめた一冊である。

様々な国籍のスタッフを束ねる統率力や交渉力に感心させられ、コンボやスーダンの苛酷な現実に驚かされた。なかでも興味深かったのは、北朝鮮に赴任した時の話。迂闊な言動がすぐ命とりになるという、独特の緊張感が詳しく描かれていた。現地人と酒席をともにするうちに幾らか打ちとけることができた描写に、彼らの鬱屈した内面も垣間見えた気がした。

文藝春秋

一五〇〇円

スマートフォンの環境経済学

吉田文和著

経済学を専門とする学者が、スマートフォンとの環境と人に及ぼす影響について研究した一冊。

全世界で急速に普及しつつあるスマートフォンは、レアメタルも使用し多数の部品からなる電子機器である。大量に製造され、新機種が次々発売されるため、最終的にはやはり大量の廃棄物が出る。先進国から途上国に持ちこまれリサイクル

ルされているが、適切に処理されないこともあり、課題は山積。海外の工場では従業員に白血病が多発し、労働問題も起きている。若者の間ではスマホ依存症が拡大しており、深く考えさせられる内容である。

日本評論社

二〇〇〇円

コトラーのマーケティング4.0

フィリップ・コトラー他著

マーケティングの神様コトラーが、モノ中心→顧客志向→価値主導と変遷してきたマーケティングの次なる形を提示。スマホが普及し、SNSが重要な意味を持つ現在、消費者の購買行動は劇的に変化し、マーケティング戦略も変更を迫られている。商品の購入だけでなく、推奨するユーザーが重要になり、マーケティング資源を投入すべきポイントも変わってきているのだ。

社会のトレンドを理論化し、実践に向けての手法を解説した骨太の内容で、営業・非営業、規模の大小を問わず、マーケティングに真剣に取り組む人には必須の一冊といえる。

朝日新聞出版

二四〇〇円

組織の毒薬

日高裕介著

組織に属しながら、組織のデメリットに押しつぶされて仕事をしている人は少なくないだろう。本書を読み進めれば、「面倒くさい」の塊だった組織をポジティブに捉えることができる。本書は(株)サイバーエージェントの社内向けコラムを書籍化したものではあるが、内容は働いている人のほとんどに通ずるものばかりである。

「良薬口に苦し」の如く、読めば自身の痛いところを突かれるビジネス書が多い中、「毒薬」とタイトルにあるにもかかわらず、著者の論し導くような文章は大変飲み込みやすい。先述の通り、元々はコラムだったのでライトに読める。ビジネス書を敬遠していた人にも読んでい



ただきたい一冊である。

幻冬舎

一五〇〇円

アダム・スミスの影

根井雅弘著

アダム・スミスが経済学の父と呼ばれ、今日に至るまで多大な影響を及ぼしていることは間違いないものの、競争・均衡というものに対しては時に誤解をほらみながら、かなり多様な立場が存在する。本書はそれらを調査しまとめた経済学史の研究書。いわゆる「見えざる手」の議論は古典派だけではなく、シカゴ学派、新オーストリア学派にも及ぶ。多様な市場観を知ることが、経済学史のみならず社会科学に関心を持つ読者にとって必須ではないだろうか。

日本経済評論社

二六〇〇円



今月の
おすすめ

「コンピュータ

WEB+DB PRESS Vol.100

創刊から十七年、「Webアプリケーション開発のためのプログラミング技術情報誌」として数多くのエンジニアに親しまれてきた本誌がついに一〇〇号を迎えた。記念記事はまつもとゆきひろ氏や高橋征義氏など著名なエンジニアが思い出深い技術書を紹介する「TOPエンジニアを支える一冊」。またRudyコミッターとして知られる松田明氏らが、迷い悩んでいた頃の自分へ現在の視点からアドバイスを送る記念エッセイ「あのときの自分へ」も。

技術評論社

一四八〇円



SRE

サイトリライアビリティエンジニアリング

Revy Bayer 他編 澤田武男他監訳

SREは常にスケールを拡大してきたグーグルで培われた、システム管理とサービス運用の方法論。信頼性を高め、手作業での運用は自動化して極力減らすなど、そのプラクティスは昨今注目の DevOps と通じる点も多い。二十四時間落ちないサービスを提供し続けるグーグルの秘技。オンライン・ジャパン 四八〇〇円

スカルプターのための

美術解剖学 2 表情編

アルディス・ザリンス著

実写と見紛うばかりのCGを目にすることも珍しくなくなったが、人間の顔をモデリングすることはいままなお難しい。顔はその下に無数の骨と筋肉を隠し、これらの複雑な組み合わせが表情を形作るからだ。本書はアーティスト向けの、グラフィカルな解剖学ガイドブック。全身の筋肉やアクションについて解説した前著『スカルプターのための美術解剖学』（同社・五〇〇〇円）と併せて読みたい。

ポーンデジタル

七〇〇〇円

「エンジニアのための

英語リーディング

西野竜太郎著

エンジニアである以上、英文との付き合いを避けて通ることはできない。しかし「英語は普通の英語とは別物。コツさえ掴めばぐっと理解しやすくなる。仕様許諾契約やAPIリファレンスなど技術的な英文ドキュメントを十一種に分類、それぞれに独特の文章構成や頻出英単語について解説する。

翔泳社

一八〇〇円

クリティカル・メイキングの授業

ロザンヌ・サマソン他編著

久保田晃弘監訳

「美大のハーバード」と呼ばれ、Airbnbの創業者など多くのイノベーターをも輩出するロードアイランド・スクール・オブ・デザイン。その真髄は思考と制作の共生関係を重視する、クリティカル・メイキング（批判的ものづくり）にある。卒業生らの獨創性に溢れた作品を紹介しつつ、学生たちから真の創造性を引き出す教育に迫る。

ビー・エヌ・エヌ新社

三〇〇〇円



自然科学

動物になつて生きてみた

チャールズ・フォスター著

たとえばアナグマ。著者はそれがどんな風に活動する動物なのか、事前に文献から知る。そしてアナグマのように穴を掘り、アナグマが食べる生き物を食べ、アナグマとして暮らす。他にもカワウソやキツネ、アカシカ、アマツバメとしても暮らしてみる。嗅覚と聴覚を研ぎ澄まし、野生動物として暮らすことでその行動の理由を体感する。古代思想で四大元素とされた土、火、水、風を、それぞれの章で五種類の動物そのものとなつて著者は経験していく。

人間の頭脳と心を持った野生動物の暮らしを追体験しているかのような奇妙で貴重な読書を楽しむことができる一冊だ。二〇一六年にイグ・ノーベル賞生物学賞受賞という本書が、面白くないわけがない。

河出書房新社

一九〇〇円

移りゆく社会に抗して

三・一の世紀に

村上陽一郎著

表題の「移りゆく社会」とは、ここでは主に、〈戦後〉の科学技術の発展と細分化、原発問題、大学制度、尊厳死・安楽死・P A D (Physician aid in dying)のあり方の変遷する社会のことである。原発問題に際する著者の立場は、原子力安全・保安院の保安部会の部会長を務めていたことから微妙ではあるが、高度細分化する科学技術問題や、職業・就職訓練所としての大学といった問題と共に、「反資本主義」的でなくしては抗い得ない。

本書の見どころは、あとがきにおいて、個人的・感情的な思考を排しきせず「これでよいのだろうか」と自問しているのだが、老と死をテーマにした第四部であろう。尊厳死・安楽死・P A Dをめぐる諸問題は、解決されるものではない。むしろ、それらを法や宗教によって規定しようとする事の限界が露呈している。だからこそ、移りゆく社会に抗して、個人的・感情的に議論されねばならないのである。

青土社

二〇〇〇円

ラボ・ガール

植物と研究を愛した

女性科学者の物語

ホープ・ヤールン著

「人間は光に向かつて伸びていく植物と同じようなものである。」

そう語る著者は、植物の研究に魅せられ、パートナーと共に三つのラボをゼロから立ち上げた女性科学者だ。

その半生は決して順風満帆ではなく、周りからの女性科学者への偏見や経済的困窮、事故、躁うつ病といった数々の挫折を味わうが、それらを乗り越え、情熱を持って誠実に生きる姿は、読者に勇気を与えてくれる。

ところどころに挟まれる植物の生態についての描写が、その後の著者の人生の展開を暗示し、奥深い味わいを生んでいるところも面白い。科学者の視点で綴られる本書の文章は、著者の温かい人柄が感じられて心地よく、何度も読み返したくなる魅力に満ちている。

化学同人

二六〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

ビビらず当直できる

内科救急のオキテ

坂本 壮著

救急という三次救急のイメージが強いが、その多くが内科系疾患（一次・二次救急）。内科救急は、幅広い分野の初期診療を行わなければならない、よりの確な判断と対応が求められる。本書は、当直業務（救急外来）に苦手意識や不安を抱いている方に最初に手に取って欲しい。「帰してはいけない患者」を救急外来で見逃さないためのポイント、内科救急のオキテから、十五の症例を通じて診断法を考える。重篤な疾患・病態を見抜く力をつけよう。

医学書院

三六〇〇円

「選ばれる薬剤師」の接遇・マナー

患者さん対応のプロをめざす！

村尾孝子著

二〇一六年から「かかりつけ薬剤師制

度」が導入され、患者さんに選ばれる薬剤師を目指す為に医療知識や技術などの経験だけでなく、信頼や安心出来るようなコミュニケーションを求められるようになった。本書は「マイナビ薬剤師」で連載中のコラム「薬剤師の接遇・マナー」をもとによくある質問などをピックアップしている。さらに協働する薬剤師や他の医療職とのコミュニケーションについてもQ&A形式でわかりやすく解説しており、様々なコミュニケーション力が身に付く一冊となっている。

同文館出版

一八〇〇円

できるナースの動き方がわかる

多重課題クリアノート

三上剛人・藤野智子監修

「月刊ナーシング」二〇一五年十月号と

二〇一六年一月号の特集を再録・再編

複数の作業が同時に発生したとき、どう
いう理由でそれを優先するかを瞬時に判断する
という能力は、多数の患者や専門職がいる看護の現場において必須である。

その実力をつけるためには先輩から学んだり、経験を重ねたり、コミュニケーションで勉強することが大切。本書では紙上

コミュニケーションでカテゴリー別に学習でき、巻末には内容をまとめた取り外し可能なドリルが付いている。

学研メディカル秀潤社 二四〇〇円

健康格差

マイケル・マーモット著

栗林寛幸監訳

世界の多くの国で、人々は昔に比べてはるかに健康で長生きするようになった。だが貧困・社会的格差を主な原因として、その恩恵はきわめて不平等に広がっている。「健康の社会的決定要因」に関する研究と政策的実践にその人生を捧げてきた著者の集大成ともいべき書。世界中の豊富な事例とデータを挙げ、著者は強く繰り返す。「不平等は改善できる」と。

日本評論社

二九〇〇円



今月の
おすすめ

人文科学

ナチの子どもたち

タニア・クラスニアンスキ著

ナチス高官たちは何を行い、戦後、自らの罪にどう向き合ったのか。その家に生まれた八人の子どもたちは、父親をどのように捉え、どう背負わざるを得なかったのか。それぞれに違うその歩みを、それぞれに違う深度ながらも丹念に、かつ読物として興味深く綴る。過去から現在への克服の足跡は、未来へ続く我々の道程のよすがとなるだろう。

原書房

二五〇〇円



宗教の誕生

月本昭男編 「宗教の世界史」シリーズ第一巻。第一部で宗教の起源について、フエティズム・アニミズム・トーテムズム・祖先崇拜・シャマニズムといった宗教現象を主題として解説している。第Ⅱ部では古代の宗教について地域ごとに論じており、その地域的特色や現代にも通ずる宗教観念が如何にして生まれてきたのかを読み解くことができる。

山川出版社

三五〇〇円

才能を引き出した情報空間

岡部晋典著

図書館を利用することが、利用者にとってのどのようなポジティブな影響を与えているのか。本書では各分野の「モンスターマインドたち」に対して取材をし、各々がどのように図書館を活用してきたかが語られる。第一線で活躍する彼らが語る体験や思考は、図書館が利用者に与える正の影響の具体例を示していると考えることもでき、非常に興味深い。図書館・読書・情報活用・本書のインタビュイーに関心がある方、一読の価値あり。

勉誠出版

二〇〇〇円

はじめてまなぶ行動療法

三田村仰著

可愛らしい表紙が目を引く一冊。手に取りやすい見た目と同様、行動療法の初学者の一助となるテキストである。

教科書として行動療法の歴史から現在の流れを、基礎にしっかりと触れつつもそれがどのように実践されるか、というところまでしっかり踏み込まれた内容となっている。巻末の用語解説まで丁寧に描かれている点が好印象。

金剛出版

三二〇〇円

「元号」と戦後日本

鈴木洋仁著

天皇陛下の生前退位をめぐり、再び話題になりそうな「元号」。単なる時代の区切りとしてだけではなく、「大正デモクラシー」や「昭和一桁生まれ」などの元号を用いた言葉から、私たちはその時代の文化や空気までもイメージするが、そのような元号の役割は「戦後」においてこそ可能だったのでないかと著者は指摘する。元号を通して、戦後を理解するための新たな視点を得られる一冊。

青土社

一九〇〇円

今月の おすすめ

文学・文芸

人生の旅をゆく 3

吉本ばなな著

ハハとなった吉本ばななの今を知りたくて、そして帯に惹かれて本書を購入。疲れた心に沁みた。ハハとして、妻として、作家として忙しい日々を送っているが、大切にしている日課がある。朝、子どもと夫の見送りをする。夜、家族みんなにおやすみの声をかける、こと。ほんの些細なことだが、見守っていたという想いこそが、大切だと思おうのである。若い頃は、そんなことだったはず。今、新しい家族を得て、両親を見送り、いろんな経験をしてきたから分かる。かけがえないものは、永遠に存在するわけではないのだと。だから、悔いのないよう、今を大切に丁寧に生きようと。毎日、その繰り返し。そうすることしかできないよと力強く伝えてくれる。ここには、彼女の小さな想い・気付きが散りばめられている。

あわせてオススメなのが、『開店休業』（幻冬舎文庫・五八〇円）。故・隆明氏（父）の食エッセイ集で、ハルノ宵子氏（姉）の追想文を収録した、とても贅沢な一冊だ。吉本家を知ることができる。

NHK出版

一四〇〇円

桶狭間の四人

光秀の逆転

鈴木輝一郎著

信長、秀吉、光秀、家康の活躍（？）を描く戦国喜劇「四人」シリーズの四冊目は、エピソードゼロのお話である。

尾張を統一したものの、支持基盤が脆弱で安心できない信長。その信長にこき使われながらも出世はできず、今川と両天秤にかけて裏切る気満々の秀吉。三河の国の城主とは言っても今川の支配下にある、苦労人の家康。能力はあるのに人生の賭けでは負け続け、人間五十年の時代にあってすでに初老と言ってもいいのに牢人暮らしをしているこの作品の主人公・光秀。そんな四人の出会いから、桶狭間の戦いまでを描く「人生意外となんとかなる」物語。

毎日新聞出版

一六〇〇円

劇団42歳♂

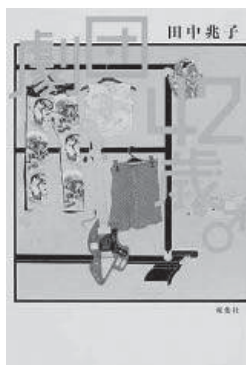
田中兆子著

大学時代に同期の男五人で結成した「劇団21歳♂」。卒業とともに解散し、それぞれ別の人生を歩んでいたが、仲間のひとり（四十歳を過ぎてから役者としてブレイクしたことをきっかけに再結成、「劇団42歳♂」として一日限りの公演に向けて動き始める……）。

いい年をした大人たちが、いい年をしているからこそ抱えるいろいろな事情もあって、ものごとはなかなか順調には進んでくれない。果たして無事に幕は上がるのか？ 面倒でややこしい、けれどもやっぱりいいもんだと思える男の友情を、名古屋を舞台に描いた読むと元気になる物語。

双葉社

一四〇〇円



今月の
おすすめ

文庫・新書

どこの家に怖いものはいる

三津田信三著

怪談好きの作家と編集者が、酒を酌み交わしながらどこか似通っている怪異について語り合う。

見えない友達と遊ぶおちいさな娘。屋根の上にとあるものをみた男。

どこまでも追いかけてくる「割れ女」。人間離れた力を持ち、まわりを不幸にしていった女。

時代も関わる人物も異なるのに、それらの怪異にはとある共通点がある。その繋がりに気づいてしまえば、あなたの耳にも届いてきてしまうかもしれない。雨など降っていないのに、小石をまいているような、何か予感めいたその音が。

明るい日差しの中にいるはずなのに、ぞわりと冷たいものが足元から這い上がってくる、最強幽霊屋敷登場。

この物件、なかなかの曰く付きだ。

中公文庫

六六〇円

ジェーン・スー 相談は踊る

TBSラジオ「相談は踊る」編

「相談」が「踊る」とは？ それは、ラジオ番組にリスナーから送られてくる相談にパーソナリテイが答える、その間に別のリスナーから反応が来たりする、まさにダンスフロアのように悩み相談を介してそこに人が集まってくるような状況だ。

この本は、番組に寄せられた相談を、「何のために生きているのかわからない」「夫が「仕事がつらい」と川に飛び込んだ」というなかなか深刻なものから、「ゼリーの汁をこぼさないようにフタを開ける方法を知りたい」というちょっとしたことで、三十三本を厳選したもの。

パーソナリテイのジェーン・スーさんとパーソナーのアナウンサーたちの親身になった回答に、笑ったりほっこりしたり、相談者ではないのに励まされたりする。「SNSと恋愛は相性が悪い」「我慢の投資は回収できない」などなど痛快な名言も連発される。

実際に役に立つ解決法や、自分や周りの人が悩んだ時にはどうしたらよいか、というヒントも沢山載っている「相談エ

ンターテインメント（あとがきより）」。

ポプラ文庫

六四〇円

マンボウのひみつ

澤井悦郎著

あの「さかなクン」もお

すすめの「少なくとも二十一世紀では日本ですすめ」の一般向けの「マンボウの本」が登場した。日本は比較的マンボウの飼育をしている水族館が多く、そこで見たことがあるということもあるのではないだろうか。意外と身近で、意外と謎が多い、マンボウという魚。

著者は幼少の頃よりマンボウに興味を持ち、マンボウの何かに携わりたいという気持ちから、マンボウ研究の道に身を投じるようになった若き研究者である。専門家として、マンボウはどういう生物か、という解説はもちろん、マンボウと日本人の歴史的な関わり、冒頭に挙げたネット上の都市伝説の真偽など、知っているようで知らないマンボウのあれこれがこの一冊でわかるようになっていく。

各項目の最後に著者による「マンボウ川柳」が掲載されていて、マンボウ愛にあふれたその味わいも楽しんでほしい。

岩波ジュニア新書

一〇〇〇円

今月の
おすすめ

芸術

IBLARD 井上直久

—世界はもっとキレイに見える—

井上直久著

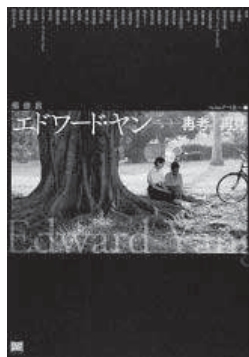
スタジオジブリのアニメーション映画「耳をすませば」主人公の月島雫が空想する世界。当時夢見がちな小学生だった私の心にズドンと響いた。何層にも重ねられた色がキラキラと輝いて、そこに吹く風の匂いも嗅ぐことができるようだった。大人になり、その世界を作り出したのは井上直久という画家だったと知る。

氏が描き出す世界は「イバラード」と呼ばれ、元々は近所や行ったことのある場所など何気ない日常風景に少し空想の翼を付けた世界である。日常の延長にある世界だからこそ心惹かれたのかもしれない。

本書は作品だけでなく対談や創作風景の記録など盛り沢山の内容となっており、飽きず楽しむことができる。

青心社

二七六〇円



エドワード・ヤン 再考／再現

フィルムアート社編

台湾ニューシネマを牽引した映画監督、エドワード・ヤン。二〇〇七年に五十九歳という若さで亡くなった彼は、一体何を表現し、そして、今の時代にどのような影響を与えたのだろうか。

本書は、映画関係者や、生前エドワード・ヤン氏と関わりのあった人たちの論考や証言、インタビュウから、その映画と、世界とのかかわりを再考しようとしている。

生前遺した八本の映画作品全てに対して論じられており、しかも様々な人がそれぞれの角度からエドワード・ヤン氏について、また、その映画について述べているので、多様な側面から見る事が出来て面白い。

「台北ストーリー」「牯嶺街少年殺人事件」など、諸事情により再上映やDVD化がされなかった作品も今年リバイバル上映され、DVD発売も決定した。

ファン必読の一冊である。

フィルムアート社

三〇〇〇円

実用手描文字

姉崎正広編著

本書の原書は『実用図案文字と意匠』という大正十五年に刊行された書籍であり、そこに収録されている文字デザインはまさに「大正モダンリズム」ともいうべきオシャレな文字ばかりで、思わず見入ってしまうほどだ。

本書で紹介している文字は全て、タイプグラフィイという概念や、ましてやコンピュータもなかった時代に制作されたものである。そんな時代に、こんなにもオリジナリティ溢れる「描き文字」が生み出されていたのだ。

コンピュータで作られた文字とはまた違ふ、手描きだからこそ伝わる、魅力あふれる書き文字の数々を是非ご覧いただきたい。

青幻舎

一一〇〇円

今月の
おすすめ

実用書
地図・旅行書

ドイツこだわりパンめぐり

見市 知著

日本で「パン」といえば、食パンやクロワッサンなどの柔らかいものが主流。けれど欧州随一のパン消費国・ドイツでは、同じ「パン」という名称で良いのか迷うほどの噛み応えとこだわりが詰まっている。そんな、「ドイツのパン」や食風景をめぐるのが本書。

「少しでも寝ていたい……」と朝食を省略しがちな日本人とは違い、ドイツのパン朝食はとても重要視されていると著者は言う。それはフリーユーステュック（朝食）のメニューが夕方まで提供されているという点から明らかで、一般家庭でも朝食会が開かれるほど。各家庭のこだわりを満喫するのも良いけれど、ここではぜひ著者がお薦めするカフェに足を運んでいただきたい。

他にも「プレッツェルの文化や」「余ったパン」専門店」などついで読みふけて

しま内容ばかりなので、あつという間
に読み終わってしまう、けれど胸いっぱ
いの高揚感が得られる、そんな一冊だ。
産業編集センター 一五〇〇円

ふだんの金沢に出会う旅へ

暮らす人が愛する167店

杉山正博・濱尾美奈子・アラタケンジ著

北陸新幹線開通以来、旅先として注目を集めている金沢。季節によっては、国内旅行の雄として他地域の追隨を許さなかった京都をしのぐほどの人気ぶりである。比較的小さい地域に見どころが集まっているため徒歩でも回れること、食事が美味しいこと、雑貨や和菓子など、若い女性に好まれるスポットが多いことなどがその理由。そんな乙女の欲望に答えてくれる新しいガイドブックが発売された。

レストラン・雑貨店・カフェ・お菓子屋さんはもちろん、ギャラリ、伝統工芸の工房から、リノベーションで新しくよみがえったホテルやゲストハウスまで盛りだくさん。

金沢を初めて訪れる方にもリピーターにも、お勧めできる一冊。

主婦の友社

一五〇〇円

ツレツレハナコの 食いしん坊な台所

ツレツレハナコ文
キッチンミノル写真

編集者で人気インスタグラマーの初エッセイ。表紙をめくると巻頭に台所の写真。著者が「家の中でいちばん、居心地のいい場所」という自身の台所である。ひとつひとつに思い出された愛用の台所道具が、ざっくりと、しかしと使いやすそうに配置されている。料理上手の方の台所を見せてもらえるのは本当に楽しい。主のひととなり自然に滲み出るように思う。吞兵衛で旅行好きな著者の台所は、もちろんとても感じが良い。料理上手の秘訣は台所にあるに違いない。

洋泉社

一五〇〇円



今月の
おすすめ

語学・辞典

英文対照朝日新聞

天声人語 2017夏

朝日新聞論説委員室編

朝日新聞朝刊の名物コラムである天声

人語は、最新のニュースや話題を題材に、

朝日新聞の論説委員が執筆・分析してい

る。大学入試にも多く取り上げられてい

ることで知られており、目にしたことが

ある方は多いだろう。本書は三ヶ月分の

天声人語の原文とその英訳をまとめた書

籍である。

日本語と英語の対比がしやすいよう、

同じページに両方の言語が並ぶ。その中

で目を引くのが、一つ一つのコラムにつ

けられたタイトルだ。日本語独特の言い

回しが多いが、英訳は工夫されており日

本語の言い回しも上手に表現されている。

また、原文の漢字にはルビが振られてお

り、日本語学習者も読むことができる。

文法解説などはないが、英文訳注があ

るので英語学習初心者に優しい一冊で

ある。

原書房

一八〇〇円

新韓国語学習 Q&A 333

hana編集部編

本書は、二〇〇七年アルクから出版さ

れた『韓国語学習Q&A 200』の内容

をもとに、「韓国語学習ジャーナル ha

na」の連載記事を加えてパワーアップ

をしたものだ。

学習者の疑問を「学習方法」「発音」「話

し言葉」「書き言葉」「文法」「語彙」の

六章に分け、韓国語教育のプロたちが悩

める学習者たちの疑問・相談にこたえて

くれる。入門レベルの情報や書籍やイン

ターネットなどに多く存在するが、中上

級レベルの疑問に答えている書籍は少な

いため、本書には中上級レベルの疑問を

多く追加している。

外国語を一人で学習していると、質問

や相談できる相手がおらず分からないま

まにしてしまったり、投げ出してしまっ

たりするかもしれない。しかし、本書で

つまずきやすい項目の疑問を解決すれ

ば、韓国語上達に一歩近づけるだろう。

HANA

二〇〇〇円

感情ことば選び辞典

学研辞典編集部編

心ときめく作品に出会ったとき、その

感動にふさわしい素敵な言葉を探したい

と思ったことはないだろうか。

本書は、感情や人物の特性を表現する

語を集めた類語辞典である。キーワード

として「愛する」「勇ましい」「敬う」な

ど、五十音順に約二〇〇語を選んで掲出

し、それぞれに人間模様や気持ちをあ

わす言葉を漢字中心に収録している。ま

た、関連するカタカナ語や擬態語、やわ

らかな言い方なども併記されているの

で、さらに細かなニュアンスをも捉えや

すくなっている。

持ち運びにも便利な大きさでピニール

カバーがされている。ひと回り大きい新

書サイズの『大きな字の感情ことば選び

辞典』（八五〇円）もあり、こちらは字

が大きめで読みやすい。

言葉の海から独自の表現を生み出した

いとお思いの方へ、手がかりとしておす

めしたい一冊である。

学研プラス

六三〇円

今月の
おすすめ

児童書



てをつなぐ

鈴木まもる作

ぼくはかあさんと手をつないだ。かあさんはいもうとと、いもうとはとうさんと、あらゆる国の人や生き物、この地球に生きる命は繋がっている。みんなで今を一緒に生きているこの地球で、手をつなぎお互いを理解しあうことの大切さを感じ出させてくれる絵本です。

金の星社

一三〇〇円

落ち葉のふしぎ博物館

盛口 満文・絵

秋が深まるにつれ、赤や茶色などの落ち葉が地面を覆うようになっていきます。この落ち葉に注目しひもといてゆくと、実に様々な特徴があることが分かります。また共生する虫との密接な関係など、自然の営みの様子が垣間見えてきます。

少年写真新聞社

一八〇〇円

理科準備室のヴィーナス

戸森しるこ著

春先に出会った女性教師に惹かれた少女。そして自分よりも先生と特別な距離にいるクラスメイトの少年、正木。先生を囲むように始まった放課後の理科準備室での交流は、次第に少女と少年の間に同士ののような絆を生みだしていきます。近づきたい、気を引きたい、どうか私を忘れないでほしい。自身の強い感情に戸惑いながらも、目を逸らすことのない中学生の姿が印象的でした。

講談社

一三〇〇円

ファニー 13歳の指揮官

ファニー・ベンリアミ著

ガリラ・ロンフェデル・アマット編

伏見 操訳

ユダヤ人の女の子ファニーは十三歳。

一九四三年ユダヤ人迫害から逃れるため、青年に引率されて子どもたちだけでスイスへ行くことに。監視の目があちこちにある中、必死で逃げる途中で突然青年はファニーにみんなを引率するように言っで逃走してしまいます。ファニーは子どもたちを守りながら必死に逃れます。命をなくすかもしれない場面での子どもたちの対応は、周りの大人の協力もあつたとはいえ想像を絶するものでした。

岩波書店

一五〇〇円

介護というお仕事

小川朝子著

日本は超高齢化社会に入り、介護はより身近なものとなってきました。家族だけで担うのは難しく、介護福祉士や介護支援専門員（ケアマネジャー）などプロの力も今後さらに求められています。

本書では小学生から身につけられる介護の基本技術が具体的にわかりやすくまとめられ、この職業を通して得られるやりがいや心構えなど、介護福祉の世界への入門書となっています。

講談社

一三〇〇円

『あるかしら書店』

河瀬 真紀

『りんごかもしれない』や『もうぬげない』などでおなじみのヨシタケシンスケさんが、「ちよつとヘンな本であるかしら？」と尋ねてくるお客さんに、「これなんてどうかしら？」とすすめる、あるかしら書店なる本屋さんを描いた絵本です。

クセになるイラスト、くすつと笑ってしまう文章、「本にまつわる本」の専門店あるかしら書店には、実に彩り豊かな本がねむっています。「ありますよ！ これなんかどうかしら」とあるかしら書店のおじさんが、奥から持ってきてくれる本に、本好き、本屋さん好きの方なら、心が踊ってしまうはず。

ページをめくる度、へこんな本、読んでみたいなあ……と思うと同時に、へこんな本を、作ってみたい！と思うてしまいました。本というのは、実は思っている以上に、自由なものなんじゃないか？と思わせてもらった一冊でもあります。

(四十六歳・主婦)

*『あるかしら書店』(ポプラ社・ヨシタケシンスケ著・一二〇〇円)

『日本教の社会学』戦後日本は民主主義国家にあらず』

吉見 満雄

私の人生観、そして社会常識を再検討する為、日本人一般の人生観、社会常識にまで掘り下げた本書を読んだ。この挑戦のために今まで何冊もの山本七平著作を読んだが、本書が一番判り易かった。それは山本氏をよく理解している小室直樹氏との対談形式によるものでしょう。まるで漫才の掛け合いのように、難しいテーマを両者が反面教師の役を演じてくれている。補足し合ったり、強調し合ったり、追加し合ったり、なんとも親切的な掛け合いが続く。お互いの合いの手が読み手の理解を確認してくれる。

日本人の信仰の独自性、一神教を信じる世界の大勢の中で異端的な独自性。それを世界の大勢の基準（神学）に対比させながらの説明は実に判り易い。特に組織、集団の基準としての「空気」の重要な役割は信仰に並ぶ独自性を持つ。日本人程「空気」を判断基準とする国民は他に例を見ない

ことが良く判る。今話題の皇位継続についても天皇制判断の背景が良く判る。責任ある立場の人々の言葉の軽さが「空体語」「実体語」の指摘で判り易い。

日本人のいろいろな分野での独自性を「日本教」と総称して括っているのが実にユニークで判り易い。「日本の常識」が「世界の非常識」と言われるのも納得できる。こうして読了後に身辺や町内を見回してみると、漱石が『草枕』で嘆いた「人情・不人情・非人情」の世界が今も変わらないことに気付いて愕然とした。

（八十歳・NPO法人役員）

*『日本教の社会学』戦後日本は民主主義国家にあらず』（ビジネス社・山本七平／小室直樹著・一九〇〇円）

ATION

<p>丸善 = 名古屋セントラルパーク店 = ☎(052)971-1231 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = ロフト名古屋店 = ☎(052)249-5592 〔営業時間〕10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 名古屋店 = ☎(052)589-6321 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 岐阜店 = ☎(058)297-7008 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 四日市店 = ☎(059)359-2340 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 滋賀草津店 = ☎(077)569-5553 〔営業時間〕10時～22時</p> <p>丸善 = 京都本店 = ☎(075)253-1599 〔営業時間〕11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 京都店 = ☎(075)252-0101 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 高槻店 = ☎(072)686-5300 〔営業時間〕10時～22時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 = 梅田店 = ☎(06)6292-7383 〔営業時間〕10時～22時</p>	<p>丸善 = 関西国際空港店 = ☎(072)456-6486 〔営業時間〕7時～21時半</p> <p>丸善 = 八尾アリオ店 = ☎(072)990-0291 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 高島屋大阪店 = ☎(06)6630-6465 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 大阪本店 = ☎(06)4799-1090 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 難波店 = ☎(06)4396-4771 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 天満橋店 = ☎(06)6920-3730 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 上本町店 = ☎(06)6771-1005 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 梅田ヒルトンプラザ店 = ☎(06)6343-8444 〔営業時間〕11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 = 近鉄あべのハルカス店 = ☎(06)6626-2151 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 奈良店 = ☎(0742)36-0801 〔営業時間〕10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 = 西宮店 = ☎(0798)68-6300 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 芦屋店 = ☎(0797)31-7440 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 神戸住吉店 = ☎(078)854-5551 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 三宮駅前店 = ☎(078)252-0777 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 三宮店 = ☎(078)392-1001 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 神戸さんちか店 = ☎(078)335-2877 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 舞子店 = ☎(078)787-1250 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 明石店 = ☎(078)918-6670 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 姫路店 = ☎(079)221-8280 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = 岡山シンフォニービル店 = ☎(086)233-4640 〔営業時間〕10時～20時</p>	<p>丸善 = 広島店 = ☎(082)504-6210 〔営業時間〕10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 = 広島駅前店 = ☎(082)568-3000 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 高松店 = ☎(087)832-0170 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 松山店 = ☎(089)915-0075 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 博多店 = ☎(092)413-5401 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 福岡店 = ☎(092)738-3322 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 大分店 = ☎(097)536-8181 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = 天文館店 = ☎(099)239-1221 〔営業時間〕10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 = 鹿児島店 = ☎(099)216-8838 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 那覇店 = ☎(098)860-7175 〔営業時間〕10時～22時</p>
--	---	--	---

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～ 午後7時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 丸広百貨店東松山店 ＝ ☎(0493)23-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時 土・日・祝10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 南船橋店 ＝ ☎(047)401-0330 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 柏モディ店 ＝ ☎(04)7168-0215 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p> <p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p> <p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-8327 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時半～19時</p> <p>丸善 ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 名古屋栄店 ＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p>
---	--	---	--

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



編集後記

年々、四季の中でも春と秋が短くなっていくように感じる。雨が降るたびに涼しさが増していくが、涼しく過ごしやすい気候も今だけだ。応援するばかりでなく、自分も動きたい。

(緒)

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五一一

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係

TEL〇三―五九五六―六一一

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二二〇円（送料込）

現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五一一

丸善ジュンク堂書店特急便係

TEL〇三―五九五六―六一二〇

FAX〇三―五九五六―六一〇〇



QRコード

PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>



「街のサイズと ニーズにあった 大型書店とは」

高槻と聞いても周辺に住んでいるか、通勤、通学で通ってでもない限りピンと来ない人が多いのではないだろうか。戦国時代の武将三好長慶やキリシタン大名高山右近ゆかりの地であり、時代をさかのぼれば、藤原鎌足が埋葬されているといわれる阿武山古墳、さらには継体天皇の陵墓の可能性が高いといわれる今城塚古墳などもある。京都大学大学院の農場移転に伴い、跡地に弥生時代の環濠集落の遺構安満遺跡を核とした公園の整備も進んでいる。市内には歴史的遺産が多い。とはいえ、外部から観光客が沢山訪れる訳ではなく、人口三十五万人あまり

の所謂ベッドタウンである。大阪へも京都へもJRの新快速で十五分、京都の繁華街河原町へも阪急電車で二十数分の立地。

京都、大阪あるいは三宮の店舗を既に利用して頂いているお客様のなかには、特に専門書の品揃えの面で物足りなさを感じられる方もいらっしゃるかと推察する。その一方で「こんなところにこんな大きな本屋があったんだ。」という驚きの声を耳にしたりもする（三階に入居している当店は、ビルの構造上エスカレーターを使うと二階以下・四階より上に行くための通路路になっている）。

周辺の他の書店と比べ決して小さいわけではなく、さりとてジュンク堂としては大きいわけでもない店舗であるが、わざわざ京都や大阪に出なくともある程度ものが揃えられるというぐらいの品揃えは期待されているように思う。街のサ

イズにあったジュンク堂。従業員一同、日常業務に追われながらも「ジュンク堂なのに」ではなく「流石は、ジュンク堂」といわれるよう、売り場づくりに無い知恵を絞る毎日である。

入居しているグリーンプラザたかつき一号館は入居当初、駅前でありながらも空きスペースが多かったようだ。しかしながら、今では各階ともテナントで埋まりつつあり、地域における当店の認知度も徐々に上がってきているようでありがたい限りである。

当地に出店して十一月で丸三年を迎える。JR高槻駅を挟んだ反対側で営業しておられるO書店さん・K書店さんと差別化を図り、ジュンク堂の色を出しつつ、層越ながら地域一番店をめざしてこれからも売り場づくり・店づくりに取り組んでいきたい。

(ひ)

「書標 ほんのしるべ」 第467号

編集・発行人 工藤 恭 孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

二〇一七年十月五日発行 頒価五十円(本体四十六円)

〒160-0008

〒653-0013

東京都新宿区三栄町二十九
ニューフィロールドビルディング
神戸市長田区一番町二丁目一

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2017年10月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第467号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN